

幼児の記憶に関する研究(Ⅱ)

—無意味綴りの再認—

○清水 容一 平川 忠敏
(広島大学)

目的 具体的絵・語を同時提示した場合の無意味綴りの再認を検討する。

方 法

手続き (Ⅰ)では、(Ⅰ)の無意味図形の再認に対応して無意味綴りの再認を検討する。即ち、無意味綴りに具体的絵(W-P群)、具体的語(W-W群)を同時提示する場合、及び無意味綴りのみ(プロトタイプのみ)提示する場合(W-N群)の3条件である。記憶事象、再認事象におけるその他の手続きはすべて(Ⅰ)に同じである。
被験者 幼稚園毎長児 36名、平均年令6歳4ヶ月。

結 果

再認a, b, c条件
をこみにしてW-P, W-W, W-Nの3群
間に有意差はみられず
($\chi^2=3.03$, $df=4$)。
W-P, W-W, W-Nをこみにしてa, b, cの3条件間にも有意差はみられなかった($\chi^2=1.72$, $df=2$)。また、記憶条件、再認条件それぞれの検討においても有意差はみられなかった。

	a	b	c
W-P	24	28	19
W-W	21	26	19
W-N	32	23	26
	77	77	64

表 1.

条件別正再認数

考 察

無意味綴りと具体的絵、具体的語を同時提示提示した場合、無意味綴りのみ(プロトタイプのみ)提示した場合、それぞれ正再認数間に有意差はみられなかった。即ち、無意味綴りと同時提示したものが具体的絵・語であっても、あるいは、同時提示物が無い場合も条件差はみられなかった。Pavio, A. (1970)は、対連合学習事象で、刺激語の語の正再認率の有意に優れていた点を考察して、刺激語の心像惹起力が優れていたためであろうとしている。しかし、Pavioの実験事象では刺激語は統制を受けていない訳で、その点を検討しようとしたのが本研究の目的である。刺激語を統制した場合、即ち、無意味綴りにした場合、

心像惹起力も統制を受け、その際、同時提示されている具体的絵・語の心像が再認事象を促進するよう媒介を生み出すのではないかと予測された。しかし、結果に明白な差は現れなかった。その原因としては、課題の適応性と、対連合学習事象ではなかったことが考えられる。

結 語

Pavio (1970)のいう概念ペグ仮説によれば、対連合学習事象における刺激語は反知項よりも心像惹起力があるという。しかしながら、彼の実験事象においては刺激語は統制を受けていない。そこで、本研究では、刺激語も統制を受け、しかも図形や言語の特質がより明らかにされ得るであろう記憶事象を用いて検討が行なわれた。(Ⅰ)では、再認条件の場合にのみ、P-N群の方がP-W群よりも有意に正再認数が多かったが、(Ⅱ)では有意差はみられなかった。これは、幼児が具体的絵・語による媒介を与えられなくとも、図形の場合には、何らかの記憶を助長する操作が暗黙的(imPLICIT)に行なわれていることを示唆しているのではないかと考えられる。この点をより詳細に検討するためには、記憶事象において、具体的絵・語が同時提示された場合の幼児のリハーサルを防止し、他に何も同時提示されない場合にも数唱などを行なわせて心像惹起を防止した事象が計画されなければならないだろう。このことはまた、成人は文脈的媒介を、幼児は空間的媒介をより用いるというPavioの指摘を消極的にではあるが支持しているとは言えないだろう。また、語は本研究では無意味綴りであるから文脈的媒介と云々はできないかもしれない。

その他、指摘され得ることをあげると、同時提示した絵・語の具体性が高過ぎたのではないかといいこと、項目数が少なく幼児には平易過ぎたのではないかといいこと、また、今回は直後再認事象での検討であったが、媒介を去くするためには遅延再認事象における要因計画が立てられてもよいのではないかとどの点が考えられよう。